

## 西晋辞賦文学研究：左思「三都賦」を中心に

栗山，雅央

<https://doi.org/10.15017/1500459>

---

出版情報：九州大学，2014，博士（文学），課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	栗山 雅央			
論 文 名	西晋辞賦文学研究—左思「三都賦」を中心に—			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	静永 健
	副 査	九州大学	教授	川本 芳昭
	副 査	九州大学	教授	柴田 篤
	副 査	九州大学	准教授	南澤 良彦

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、三世紀後半の中国、すなわち西晋時代に活躍した文人左思（253～307）の畢生の大作「三都賦」（蜀都賦・呉都賦・魏都賦）を中心に、その辞賦と呼ばれる文学作品がどのような社会背景の下に製作され、また後世の中国においてどのように伝播し、辞賦の代表的な作品として読まれていったのかを考察したものである。

そもそも現在の文学作品の研究は、西洋文学における韻文と散文という大きな枠組みを前提としているため、古代中国、特に漢代から六朝時代において盛んに作られ一時期にはその主流でもあったはずの「辞賦」についての研究は、日本および中国を問わず、いずれもその成果はいまだ十分ではない。韻文の代表としては詩歌の研究が圧倒的に多く、散文においては史伝の文学、また六朝期に勃興する志怪小説や故事逸話集についての研究がその大半を占めてきたからである。しかし、古代中国の伝統的な文学観念に従えば、『詩経』の流れを汲む「辞賦」こそがその文学の王道であり、各時代を代表する最も優れた精華であった。本論文の上篇が、左思「三都賦」が製作された同時代の中国、すなわち西晋王朝の創業者武帝司馬炎（在位 265～290）とその政治機構の一つである中書省に着目し、左思の文学創作が、まさしく武帝司馬炎の意向を反映した国家的な事業の一環であったことを論じたのは、まさにこの辞賦という文学創作が、当時において如何に重要視されていたのかを明確化するものとなった。

ちなみに左思「三都賦」については、従来からも、その発表されるやいなや衆人が皆こぞって筆写し「洛陽の紙価が高騰した」という逸話が有名であるが、本論文は、このことが単に左思個人の文学的技量のみならず、当時の社会通念にも触発されたものであったことをはじめて明らかにしたのである。

本論文の下篇では、伝統を重視する古代中国の文学観に留意し、漢代以来の辞賦文学の流れの中で、左思が如何なる点を受け継ぎ、そして如何なる点において発展的創造を試みたのかを論じている。多くの辞賦作品の中で、この左思「三都賦」のような型式のものは特に「都城賦」と称され、梁の昭明太子編『文選』においても後漢の班固「兩都賦」や張衡「二京賦」等とともに、その冒頭に列せられるものであったが、しかもその昭明太子が「三都賦」を『文選』の中で最長篇の作品として取り上げていることは、六朝時代における「三都賦」の規範性を考えるにおいて興味深い事象である。本論文では「三都賦」以降の都城賦作品として鮑照「蕪城賦」や庾信「哀江南賦」等をも取り上げ、左思によって確立された都城賦の伝統がどのように継承されていったのかについて具体的に検証している。なお「三都賦」本文については、従来一般

的に用いられてきた『文選』宋刊本ではなく、我が国平安時代の古写本『文選集注』を底本を選んでその一字一句を丹念に校訂し、我が国に残存する古写本が歴史的に如何に優れた価値を有するかを具体的に立証している。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。